

知っておきたいくすりの豆知識

④

薬剤部

薬は様々な形や使い方があり、前回までの「知っておきたいくすりの豆知識」では内服薬の種類や飲み方などについてご紹介しました。シリーズ4回目の今回は、外用薬について詳しく取り上げていきたいと思えます。

外用薬

外用薬は、人の身体に直接作用するお薬のことを指します。大きく分けると皮膚に使う塗布薬や貼付薬、目・鼻・耳に用いる点眼薬・点鼻薬・点耳薬、気管支や肺に用いる吸入薬、肛門に用いる坐薬があります。

お子さんや高齢の方で内服が困難な場合でも症状に合わせて使うことができます。

塗布薬

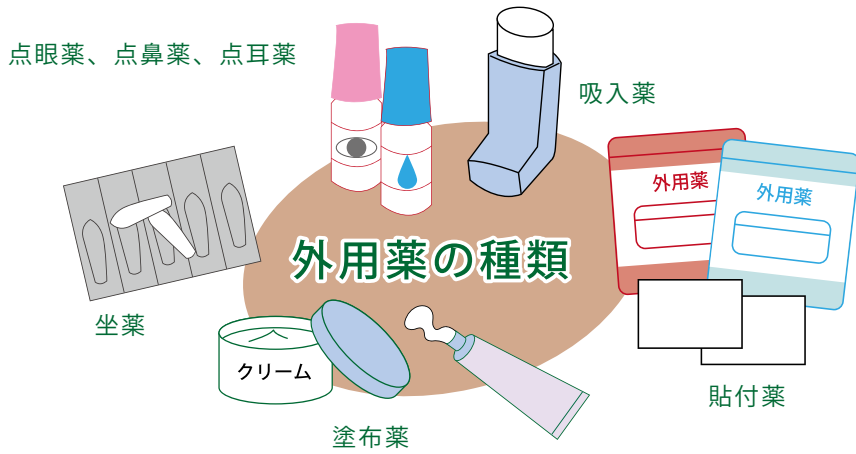
塗布薬は有効成分と基材（ベースとなるもの）が混ざった、皮膚などに塗るお薬です。基材の違いによって軟膏、クリーム、ローションなどの種類があります。軟膏は刺激が少なく塗り薬でほとんどの皮膚疾患に使用でき、付着性が高いのが特徴です。クリームはさらさらとした使用感が特徴で、水で簡単に洗い流すことができます。皮膚からの吸収が良く、水虫など皮膚の深いところに浸透させたい場合に適していますが、軟膏に比べ刺激があるため傷口には適していません。ローションは、頭皮など、軟膏やクリームでは塗りにくい部位によく使われます。スプレータイプもあり、

範囲が広い所にも使用可能です。即効性に優れるため、かゆみ止めに適しています。一番使用感が良い反面、持続時間の短縮や皮膚乾燥作用といった欠点もあります。クリーム同様、ただれている箇所や水泡になっている部位への使用は不向きです。症状や部位での使用感や刺激の有無、皮膚への浸透しやすさの違いによって使い分けていきます。

貼付薬

貼付薬にはパップ剤、テープ剤などがあります。パップ剤は水分を含んでいて冷感や温感タイプがあります。冷感タイプは急性期の炎症（筋肉痛や捻挫など）に、温感タイプは慢性的な

炎症（腰痛や肩こりなど）に適しています。粘着力が弱いためはがれやすいですが、テープ剤と比べてかぶれにくいという特徴があります。テープ剤は粘着力が強く、はがれにくいため関節部位など動く部分に向いています。長期で使用するとかぶれてしまうことがあります。かぶれにくくするための工夫として、貼るときは患部をしっかりと拭き、長時間同じ部位に貼ることは避け、毎回貼る位置をずらすようにしましょう。また、貼付部位が日光にあたると痒みや発疹などの炎症を起こすことがあるので、注意が必要です。



点眼薬、点鼻薬、点耳薬

点眼薬、点鼻薬、点耳薬は、お薬を眼、鼻、耳に使用するものです。使用前は手を洗って清潔にし、鼻をかんだり耳掃除をしたりして準備をしましょう。点眼薬は1滴で十分に効果があります。点眼した際は薬液が眼全体にいきわたるようにしばらくまぶたを閉じます。2種類以上ある場合はそれぞれの間は5分程度あけてから使用してください。点鼻薬は頭をうつむき加減にして片方の鼻をふさぎ、噴霧するようにしましょう。点耳薬は冷たいまま使用するとめまいを起すことがあるので、容器を体温に近い温度まで温めてから使用しましょう。2種類以上ある場合は点眼薬とは異なり、基本的には続けて使用しても構いません。

吸入薬

吸入薬はお薬を霧状に噴出し、口から吸いこみ気管支や肺に作用させるものです。吸入薬のポイントとして、吸入する時間を決めて習慣づけるようにしましょう。発作時など屯用で使うものは症状が出たらすぐに使うようにしましょう。ステロイドの入った吸入薬を使用する場合には声がれ、口腔カンジダ症などの痛みなど局所的な副作用が起ることがあります。副作用の予防として吸入後のうがい徹底しましょう。小さなお子さんには飲水でも十分な予防効果がありません。



坐薬

坐薬は肛門に挿入して使用するお薬です。痔など局所的に作用するものと解熱・鎮痛など全身作用を有するものがあります。一般的に、内服薬に比べて体内に吸収される割合が高いため、速効性が期待できます。小さなお子さんには仰向けで両足を持ち上げた姿勢で、肛門内に深く入れて4〜5秒押さえておくと簡単に入れることができます。

外用薬には様々な種類がありますが、それぞれを決められた用法で正しく使用してください。薬の使用方法などわからないことがあれば、病院やかかりつけ薬局にお気軽にご相談ください。

次回は注射薬について、知ってほしい知識や注意点を紹介します。

(担当：薬剤師 牛澤侑美・山口美紀)